

## 織物から社会をみる

高橋 理枝

シリアの首都ダマスカスの名をとってダマスク織と呼ばれる織物がある。特徴的な模様をともなう織り方で、今では世界中で生産されているが、内戦前のダマスカスでは土産物のひとつであった。特に絹のダマスク織は美しく煌びやかで、一度手に取ると手放しがたい魅力があった。

そんな布の魅力に取り付かれた研究者が執筆したのが、加納弘勝著『旅する人の地域研究…ビーズ・織物・影絵の語る現代世界』（文化書房博文社、二〇〇五）である。本書は、グローバル化の時代の地域研究のあり方を模索するもので、織物やビーズ、人形劇といった「文化的なモノ」から地域文化に接近する試みである。本書にダマスク織は登場しないが、加納先生は筆者が赴任中のダマスカスにもいらして、一緒に回った土産物屋で模様のモチーフの解説をしてくださった。内戦のなかでの土産物屋も美しいダマスク織もどくなつたか、今は知るすべもない。

内戦で途絶えてしまった織物を復活させた物語もある。森本喜久男著『カンボジア絹緞の世界…アンコールの森によみがえる村』（日本放送出版協会、二〇〇八）は、友禅の工

房を開いていた著者がカンボジアの絹緞と出会い、伝統の技法を発掘し復興する。その取り組みは、織り手の女性たちの生活支援から、織物を産み出す自然環境や生活空間の再生にまで及ぶ。行間からは、織物と「おばあ」たちをはじめとする地元の人々への深い愛情と自然への敬意が伝わってくる。

カンボジアの絹織物業は、UNESCOなどが文化的価値を再評価したことや、農村における生活手段の多様化のためその発展が期待されていることから、政府機関や海外援助機関が支援している。荒神衣美著『カンボジア農村部絹織物業の市場リンケージ』タカエウ州バティ郡トナオト行政区P村の織子・仲買人関係』（天川直子編『カンボジア新時代』（日本貿易振興機構アジア経済研究所、二〇〇四、第四章））は、織子と仲買人への聞き取り調査をもとに、農村部の織物生産者と原材料供給市場および生産品販売市場とのつながり（II市場リンケージ）を分析し、何が絹織物業の発展を促進／阻害するのかを検証している。

こうした地域性の強い織物は日本でも人気だが、その宣伝文句は、布の産地を伝統的な社会としてオリエ

ンタスティックに描くことが多い。人類学においても織物から地域文化や独自の世界観を探索する研究が続いてきた。しかし最近の研究は、地域社会とグローバルな市場とのつながりや変容に着目している。

田口理恵著『ものづくりの人類学…インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』（風響社、二〇〇二）は、集団の文化や社会を閉じた世界として読み解く研究のあり方を批判している。島の外へと流通していく布や布づくりの商業化なども含め、モノづくりが人を作り、人の関係を作り、地域社会のくらしを支えるあり様を問い直していく。博士論文を基にした著作だけに読み応えがある。

中谷文美著『女の仕事』のエスノグラフィ：バリ島の布・儀礼・ジェンダー』（世界思想社、二〇〇三）は、バリの農村社会の女性が「日々していること」を丁寧に記述することをとおして、「仕事」と「仕事ではないもの」への区分に疑問を呈する。バリでは、一九七〇年以降に織物業が発達し、女性の機織りのもたらす収入の重要性が増す一方、儀礼のための供物づくりにも多大なエネルギーが要求される。「儀礼が機織りか」（日本で言うところの「家庭か仕事か」という問題に日々向き合う女性たちの日常とその変化が語られる。

また田村つらら著『トルコ絨毯が

織りなす社会生活…グローバルに流通するモノをめぐる民族誌』（世界思想社、二〇一三）では、婚姻慣習という「経」と絨毯という「緯」が、人類学的な手法で織りなされ、市場経済に接合したもののづくり生活世界が、市場と絶えず交渉しながら変化／持続する多様なあり方が明らかにされる。農村社会の女性たちの暮らしが豊富な写真とともに生き生きと描かれており、読んでいて楽しい。

最後に、織物業から社会の負の部分を描いたヒューマン・ライツ・ウォッチ著、国際子ども権利センター訳『小さな変革…インドシルクという鎖につなげる子どもたち』（創成社、二〇〇九）を紹介したい。これは、ヒューマン・ライツ・ウォッチによる調査をまとめた『インドの債務児童労働…見えない鎖につなぐ』（明石書店、二〇〇四）に続く資料である。インドの絹織物業では全工程で借金返済のために子供達が過酷な状況で働かされている。法律では禁じられている債務児童労働がなぜ大規模に存続し続けるのかを、法の執行者の考え方や執行の現状に焦点を当てて分析し、日本でも人気の美しいインドシルクの生産のため、奴隷状態で働く子供達への理解と支援を訴えている。

（たかはし りえ／アジア経済研究所 図書館）